

哲學研究

第四百四十二號

第三十八卷
冊

前ソクラテス期のギリシア哲學

における不可分なもの

鈴木 照雄

- 一 ピュタゴラス學派の \wedge — \vee の二重性
- 二 エレア派の存在の論理——ゼノンの無限分割
- 三 エムペドクレス、アナクサゴラスと \wedge 不可分なもの \vee
- 四 レウキッポスの \wedge 不可分なもの \vee

不可分なもの \vee という概念は、がんらい無限分割 \vee を阻止する否定概念であり、その意味で、後者に從屬するものである。ところで、無限分割 \vee が、ギリシア哲學に登場して大きな意味を獲得し、決定的な影響を與えたのは、エレア派のゼノン (Zénon o' Eleaticós) においてである。したがつて、不可分なもの \vee という概念も、嚴密には彼より後に成立すべきものであり、實際にまたその通りであつた。もつとも、アリストテレスの敍説には、そうな

つていないことがあるが、これは、彼が自分よりも古いものを説明するときに、しばしば同一内容のより新しい術語をもつてするという彼のやり方に由来するのであつて、彼の用語がそのまま、取扱われている對象そのものに屬するのではないことは言うまでもない。さて、ゼノンの無限分割は、その成立の事情において考えると、彼と對稱的な思想——すなわち、不可分のものを指定してその上に打建てた體系——を破壊するために創られた否定の論であるからして、彼の前に、そうしたアトム論的な考え方をした哲學が、當然想定されなければならない。かかる哲學を探求することは、要するに、紀元前五世紀初頭以前のギリシヤ哲學の中で、不可分のものの上に立つ哲學體系を尋ね求めることに外ならない。この目指す當のものが、前六世紀から前五世紀初頭にかけてのピュタゴラス學派(οἱ Πυθαγόρειοι)であらうことを、豫めここで設定しておく。したがつて、われわれの次になすべきことは、上の設定を根據づけることであるが、それは次の問題を考察することを意味する。すなわち、

果してピュタゴラス學派が、目指す當のものか。彼らの主張する何が不可分なものに該當するか。また、その不可分なものに該當するものは、どんな特徴をもつているか。

という問いである。さて、ピュタゴラス學派が魂の淨め(κάθαρσις, καθάρσις)を彼らの生活——いわゆるピュタゴラス的生活法(ὁ Πυθαγόρειος νόμος τῶν βίου)——の中心に置くことは、オルペウス教に由来することであるが、その淨めの具體的内容として、學問研究、なかならず數學研究を最も重視したことは、彼ら學派の特色であり、いわゆるピュタゴラス學派として、彼らが哲學史を構成する一員となるべき機縁をなした點である。このことを確立したのは、學派の創設者ピュタゴラス(Πυθαγόρας)であつて、後の學者たちはこの點を、「ピュタゴラスは初め數學と數(の性質・構造)について専心研究し」とか「ピュタゴラスは幾何學の原理を上からの仕方の研究し、その定理を非物體的に抽象的に探求し、かくすることによつて自由人に相應しい教養の形に移した。」というふうに述べている⁽⁴⁾。もちろん、これらの敘説を言葉通りに受取ることはいろいろ問題もあるが、少くとも彼が「(數の研究を)商

賣人の利用から解放して「純粹なものにしようとしたこと、つまり、直接實利的に取扱われてきた數學的知識の斷片を、純粹に學問的態度をもつて數學の方向に發展させたことは、まづ間違ひあるまい。この點には、フランク(Frank)の異論もあるが、いろいろな點を考えると、彼の說には從えない。さて、ピユタゴラスに始まる數學の研究は、彼らの有名な三角數やグノーモン(gnomon)において明らかのように、がんらい數論ともいふべきものに始まる。それは、小石か何かそのようなものを平面上に並べて、各々の數の性質や特色、並びに數相互の諸關係を考察するものである。しかもこの特色は、彼らのうちに終始存続したものであつて、このことは、時代を遙かに降つて前四世紀に入つてもエウリュトス(Euclides)によつて明示されているのである。彼は、人やいろいろな動物などの本質を表すのに、それらの線畫をかき、その畫の輪廓線上に一定の間隔で小石を並べ、その小石の總數をもつてしたということである。幾何學においても、線分を(整)數で表して、これら數相互の關係を考察するというのが、本來の姿であるからして、フランク流の言い方をもつてすれば、彼らは、數論の中に引き込まれ數論化された幾何學を考究したわけである。従つて彼らにあつては、絶えず整數が問題になるのであつて、分數は整數の比として把えられたのである。つまり、彼らの數學を構成している數は單位一の集合であるから、窮極的には、彼らの數學の始源は單位の一であり、その數學はこの一から構成される多(數)を取扱うもの、ということになる。このような數學研究のうちに培われた眼をもつて、この世界を視、萬象の本質を探索するとき、彼らはこの世の至る處に數關係の支配を見出す。その場合、彼らに特別重要な意味をもつ音樂の、數的構造が範例として働いたことは言うまでもあるまい。ところで、ここまでくれば、ミレトスの哲學者たちにもみられるあの「經驗の普遍化」(その説明の不充分と飛躍のゆゑに、ときに非科學的とも非難されることがあるが)は目の前にあるのであつて、これが「萬物は數である」というピユタゴラス派の根本思想となるのである。この間の事情を、アリストテレスは次のように言つている。「この人々(原子論者レウキッポス、デモクリトス)と同じ頃、いや、それ以前にも、ピユタゴラス派と呼ばれる人々は、史上始め

て數學を研究することによつて、數學を進歩させたのであるが、そのみでなく、この研究に培われて、『數學上の基礎的なものが萬物の根源である』というふう⁽⁹⁾に考へた。すなわち、數はこれら數學上基礎的なもののうち、本性上第一のものであり、しかも、彼らは、火や土や水におけるよりも、むしろ數のうちにこそ、事物（存在するものであれ、生起するものであれ）との數多くの類似點を觀取すると思つたので、……これを要するに、萬物はその本性をすべて數に模してゐるように思われ、しかも數は全自然界のうち第一のものであるから、……全宇宙は音階⁽¹⁰⁾であり數である、と彼らは解したのである。」と。

ところで、數關係とは、言うまでもなく、超時間的な關係であり、かかる超時間的な關係のみを觀想する眼をもつて自然界を視るとき、自然界の超時間的な存在秩序がまづ第一に問題にならう。彼らは、がんらい數學者に始つたが、その意圖するものは自然學的問題であり、彼ら自身自然哲學者であらうとした。彼らの研究は數學から自然哲學へと發展し、彼らの精力は自然の解明に専ら注がれるようになった。すなわち、數を自然解明の原理とし、數學的方法をそこに適用するのである。アリストテレスの叙説を借りるならば、「いわゆるピュタゴラス派の人々は、彼らの（哲學の）原理と要素として、例の自然哲學者たちのそれよりも、適切でないものを使つてゐる。……しかしそれにも拘らず、彼らが論じ研究するのは自然界に關する百般のことがらである。」⁽¹⁰⁾しかし、彼らの用いたこの超時間的な原理と方法とをもつてしては、時間の世界、すなわち、生滅變化常なき自然は、必然的に消え去らねばならない。しかしながら、彼らは自然學的な言表を希望し、宇宙生成（*cosmogonia*）という傳統的な問題を自己の課題とする。宇宙生成という時間的問題を、自然哲學者であらうとする意圖から取上げるとき、彼らがそこに用いる原理の矛盾と不適合とは、がんらい明らかなはずであり、すでにアリストテレスにも明らかであつたのである。しかも自然哲學の原理としての數の矛盾はこれに止るものではない。自然は、感覺される有形の充實體（*plenum*）の世界であり、物體（*ousia*）の世界である。この物體界の原理に、どうして數がなりうるか。これもまた、アリストテレスが訝り非難したところ

である。⁽¹⁾ 數はがんらい抽象的なものであり、觀念的なものであるはずである。しかし上に述べた矛盾も、數が、それだけのものをそのものたらしめる數的规定として、いわば形相因的なものであるならば、また考えようもある。しかし彼らは、諸物が實際に數から構成されている——ちやうどミレトス學派における始源(ἀρχή)としての水や火などのように、それらを素材として成立している——と考えていたのであり、 \wedge 萬物は數である \vee というのは、言葉通り萬物 \parallel 數を意味していたのである。⁽²⁾ これは、萬物を單位一の集合體として考えることである。

さて、われわれは一先づここで立ち止つて、數に關する上のわれわれの疑問を吟味してみよう。われわれが、ピュタゴラス派の數觀の矛盾を感じたとき、われわれが暗黙のうちに持つていた數觀は、今日人々が懐いている抽象的な觀念上の數である。アリストテレスがピュタゴラス派を批判したとき、彼の持つていた數觀もまたわれわれと同じものである。しかしながら、もし彼らピュタゴラス派の數觀がわれわれのと異つていたら、どうであろう。問題は全くその様相を變えてくるのではないか。われわれは、學派の創始者ピュタゴラスが前六世紀の人であつたことを、まづ想い起そう。そしてその數學研究において、小石様のものを平面に排列することによつて研究するという方法が、ずつと後までこの派のうちで受け繼がれていつたことに、想いを馳せよう。この、研究開始の時期が非常に古く、數觀念が想像以上に素樸であつたろうことは、上のような彼らの研究方法の特色と相まつて、思うに、次のことを促進したのである。すなわち、彼らの數學研究の結果發見された \wedge 諸物のうちにおける數の支配 \vee という事實が、逆にその發見者たる彼らの方に作用し返して、われわれの考えるような抽象的な數(アリストテレスのいわゆる \wedge 數學的數 \vee *ἀριθμητικός ἀριθμός*)とは異つた、そのような抽象を経ぬもつと具體的な數が、考えられていたのである。上に述べた、數の研究に對する彼ら特有の方法は、言うまでもなく、數を絶えず空間的に考へることであり、その意味では、先程とは逆に、幾何學化された數論(すなわち、圖形化されたという意味で)とも言えるであろう。従つて、このような形式の數論における數は、絶えず圖形と相即して考へられるものであるから、單位の一は、一定

の位置をもつた一 (*μονὰς ἐξουσιθεῖον*) と考えられ、 \wedge 點 \vee と等置されるであらう。(15) この單位一に等置される點が、極限として密に考えられるものでなく、何らかの大きさをもつものとして考えられていたことは言うまでもない。しかも、數はすべて單位一の集合體として、單位一から構成されているように、この一はまた、宇宙生成の端緒をもなし(すなわち、この端緒をなす一を、 \wedge 最初の一、*πρῶτον ἓν*) とアリストテレスは呼んでいる(16)、これから多を含む宇宙が出来上つていつた、と考えたのである。言うまでもなく、單位一の、この場合に考えられている性質は、宇宙の構成要素をなす言わば物體的なもの(アリストテレスのいわゆる \wedge 物體的數 *συνθετικὰς ἀριθμῶν*) であり、この點と關連して、アリストテレスも \wedge 大きさをもつた一 \vee とはつきり言つている。従つて彼らの數は、 \wedge 數學的數 \vee と \wedge 物體的數 \vee とが別々に考えられたものでなく、兩方を未分の状態において含んでいるのである。すなわち、彼らにおいては、何らかの大きさを持ち空間的に位置する一として、物體の構成要素をなすとき一が考えられていたわけである。(16) このような一よりなる彼らの \wedge 數 \vee が、プラトンの考えた超越的な數と異つて、諸物に内在する (*ἐν τῷ αὐτῷ*) ものであることは自明である。ピュタゴラス派の考える世界は、このような一の集合によつて構成される不連続な世界なのである。ここで、一は單位である以上、いわゆる \wedge 不可分のもの \vee であることは言うまでもない。(17) しかもこの一は大きさをもつ一であるからして、それは \wedge 不可分の大きさ \vee (*ἀκρόν μεγέθος*) のものとなる。従つて彼らの説くところによれば、この世界は \wedge 不可分の大きさ \vee から構成される不連続な世界であるということになる。

しかし、彼らの考え出したこの一がいろいろな矛盾を含んでいることは、以上の考察からしても、明らかである。彼らが、自然界の原理として、單位一をもつてきたのは數學からであつた。なるほど、彼らの考えた一は素樸なものであつたが、數學的に整數の單位としての一そのものを考えれば、それが \wedge 不可分なもの \vee であることに間違いはなくとも、空間的な \wedge 大きさ \vee という要素が加りうるものではない。彼らによつて一が點に等置されたのはよい

が、しかしその場合に考えられた點は（空間的大きさの上で）極限容としてでなく、何らかの（空間的）大きさがその背後に考えられる點である。かかる一（ \parallel 點）が、この世界の構成要素として、何らかの意味で物體的とされるに至つては、純粹に數學的な一からは全く離反してしまう。一がこの世界の諸物の構成要素として大きさをもつものである以上、理論的には無限分割は避けられぬはずである。従つて \wedge 不可分の大きさ \vee というのは、無限分割を成立させた理論と同一次元においては、自己矛盾の概念である。しかし、彼らの一が大きさを持つに至つた必然性は、彼らの自然哲學に由来した。これは、上述の彼ら特有の研究方法に由ることもさることながら、數を自然哲學的に適用した無理の結果であろう。すなわち、數學的なものと自然哲學的なものとが、彼らの \wedge — \vee のなかに混在し、未分の状態にあつたということである。彼らの側からいへば、その混在・矛盾を意識せず問題にせぬまゝに、彼らの哲學の基礎として彼らの \wedge — \vee を使つていたということになる。ところで、「數學的なものと自然哲學的なものとの混在」と言つたが、むしろ、數學的なものへの自然哲學的なものの混入、自然哲學的なものによる數學的なものの混濁化、と言つた方がよいかもしれない。なぜなら、彼らの自然哲學は、その本質においては、あくまでも數學的であるからである。この數學的本質という點は、後の原子論と較べるとき、非常に明らかになるであろう。

(註)

- (1) \wedge 不可分なもの (ἀμερόν) という言葉は、 ἰσοτόν 、すなわち切斷 (ἰσοτόν \wedge $\text{ἰσότης$) の否定 (ἀ) を表す。
 (2) 例えば、ピュタゴラス學派の中心思想を述べる箇所 (Met. 1083 b 13) で、 ἄτομα μέλη (不可分な大きさ) という表現を用いてゐる。
 (3) 拙稿「セノン—否定の精神」(西洋古典學研究Ⅲ) を参照されたい。
 (4) Arist. apud Apollon. mir. 6 (前著)
 Procl. in Eucl. 65, 11. (後著)

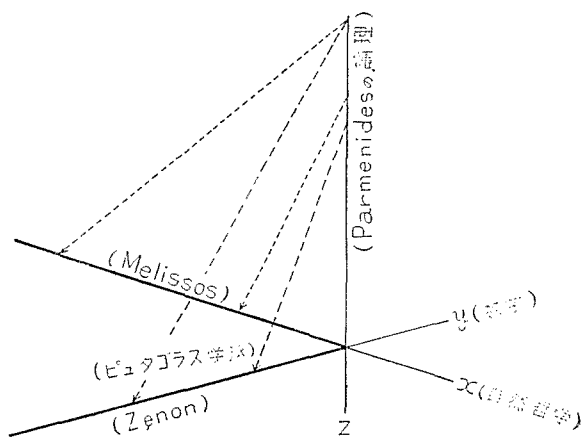
(5) 彼の著 Plato und die sogenannten Pythagoreer の論旨によれば、ピュタゴラス學派の數學研究は、四世紀のアルキメタス (Archimedes) を中心とする學派の人々に全く屬するものであつて、それ以前のピュタゴラス派に對しては、學派としての前ソクラテス期のギリシア哲學における \wedge 不可分なもの \vee

タゴラス派のそれを絶えず意識し、それを單なる人間の憶見迷妄であると論難していたものようであるが、しかしそれによつてピュタゴラス學派は破壊的影響を被つて消滅したわけではなく、同じ南イタリアに兩者並存して互に論争し合つたようである。しかもその間、ピュタゴラス派は、エレア派哲學に影響されて、自己の根本思想を改變するということもなく、やがてゼノンの登場に至るのである。その意味で、パルメニデス哲學の出現そのものは、直接ピュタゴラス派の哲學と何ら關係するものではない。しかし感覺的經驗によつて動かされず、理性に從つて、嚴密な論理を展開した彼の哲學は、それまでのギリシア自然哲學に決定的な作用を及ぼした。すなわち、同一律を嚴守することによつて、へ在るものは在り、在らぬものは在らずと主張し、へ在るもの (to on) とへ在らぬもの (to mi on) とに對して、論理的に徹底した考察を加える。この場合、在らぬものはへ空虚な空間 (kenon) であり、在るものは、それに對して、内容の充實した物體であるという根本觀が加わる。空虚な空間の存在を否定することによつて、眞に存在するものは唯一の永遠(不生不滅)・不動・不變・均質でなければならぬ、とする。従つて彼にとつては、自然哲學の對象となるこの世界——それは恆常性なく、不斷に生滅變化する雜多の世界である——は、へ何ごとも知ることなき人間の迷妄であり、實在性のないものとなる。彼の哲學が kosmos と時に呼ばれるゆゑであるが、この世界の存在が——それが現にあるがまゝの姿において——否定されれば、自然哲學の據り所は失われ、自然哲學は、彼の言うように、へ人間の單なる憶見となつて、その學問的意義を否定されてしまふ。従つて、一元論的見地に立つて、この世界の始源を求め、それからこの世界の生滅變化と雜多とを説明しようとしたイオニアの諸哲學も、彼の説く論理を犯すことによつて、否定されなければならぬ。彼の存在の論理は、へ在るものへ充實せる物體として存在するもの、へ在らぬものへ空虚な空間というふうな等置することによつて、なおイオニア自然哲學の延長線上にあるものではあるが、しかし他面、感覺經驗から斷絶した徹底的なその論理主義は、彼の哲學を、經驗事實の上に踏まえた自然哲學とは異質的な、形而上學となした。従つて、彼の哲學がそれまでの自然

哲學に影響を與えたことは、いわば次元を異にするものが自然哲學に切り込んで來た形である。このように次元を異にし互に異質的なものが、どうして交りえたかといへば、上に述べたようなへ在るものへに關する彼の考え方の方向が、共通の基點を提供していたからであつて、このへ在るものへを、論理というそれまでとはまた別の光で照らし出したところに、パルメニデスの自然哲學的な意義があるわけである。アリストテレスがその自然學の頭初において、「しかしながら、彼ら（エレア派の人々）は、（生滅變化常なき）自然について説いてはいないが、たまたま自然學的な難問を敍べる結果になつていたので、彼らについて少しく語ることは、おそらく適切なことであらう。つまり、その考察は、哲學的興味のあることだからである。」と言つてゐるのは、以上の事柄を意味してゐるものと思われる。

このパルメニデスの論理とそれまでの自然哲學との衝突という圖式を、われわれが今問題にしているピユタゴラス學派のへ不可分なものへと焦點を合せ、その衝突の規模を縮少するとともに、その問題點を、一つところに凝縮することによつて、明確にした者はゼノンである。

説明の便宜上、三次元を表す x 軸・ y 軸・ z 軸を考え、 x 軸は自然哲學、 y 軸は數學としてみる。さてゼノンの論敵ピユタゴラス學派の哲學は、數學的なものと自然哲學的なものととの複合體であるからして、この圖式においては、 x 軸と y 軸とによつて作られた平面に當る（それも、より y 軸に寄つた部分に當る——なぜなら、彼らの哲學は、その根本において、より數學的であるから）と考えられよう。ところで、パルメニデス哲學の擁護者ゼノンが、この數學的な本質をもつピユタゴラス派の哲學を攻撃するためには、パルメニデスの存在の論理という第三のもの——それは前二者とはまた別の異質的なものであるから、 z 軸によつて表わされる、としてみよう——を數學に翻譯する必要が生じてくる。すなわち、ピユタゴラス派に立向つたゼノンの論は、 x 軸を投影した y 軸（太線で書かれた部分）の立場ということになる。この y 軸の部分に沿つて、彼らピユタゴラス派の立場——すなわち、へこの世界は、ある



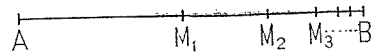
(fig. 1)

れる (fig. 2)。この無限分割の上に立つて、ピュタゴラス派の一を考えてみると、それは、不可分なものゆえ、かかる無限分割の末に到達すると考えられるものでなければならぬ。従つて逆に、いかなる量、すなわち多も、單位一の集合 \parallel 多という彼らの考え方に従えば、 $\perp \times \infty$ となるわけである。これを用いたのが彼のいわゆる多論であり、運動論の第一・第二である。しかし、今述べたことは、また次のようにも考えられる。すなわち、ゼノンの無限分割論

前ソクラテス期のギリシア哲學における \wedge 不可分なもの \vee

大きさをもつ物體的な單位一の集合によつて構成される不連続な多の世界である。従つてこの世界の構成要素は、大きさをもつた(不可分の)一(\parallel 點)である \vee という立場——を前提とし、そこから彼らを二律排反に落し入れることによつて、彼らの内含する矛盾を衝くのが、彼の論であつた。これが彼のいわゆる *dialectic* である。従つて、彼の論において前提されて

いる多はすべて、單位一の倍數として考えられているのであり、線——廣くは、空間——は點の集合によつて構成されたもの、時間は、單位時間である瞬間の集合によつて構成されたものである。従つて運動は、各々の單位時間に對應する(それぞれ位置を異にしつゝ連続する)點の集合によつて表される。彼のいわゆる運動論第三と第四にあつては、始めからこのような時空観を出發點となして、論を進めている。しかし躡つて考えてみると、凡そ大きさをもつたものは、理論的には、無限に分割される。例えば、線分は無限に分割されていくと考えら



(fig. 2)

によれば、凡そ大きさをもつたものは——よしんばそれがいかほど微少であろうとも——無限分割されなければならないが、無限分割の極限は、理論的には、零、つまり大きさをもたぬもの、でなければならぬ。この見方に従えば、ピタゴラス派の主張する世界は、このように大きさの零なものから構成されている、ということになるから、この世界そのものが存在しなくなる。なぜなら、彼自身も言つてゐる如く、凡そ大きさのないものは無であり、存在しない（もちろん、パルメニデスの言う存在）からである。このことは、彼らによつて単位一と等置されている點を考へても同様である。線分を無限分割した場合の極限としての點は零であるから、かゝる零である點から、一定の長さ（大きさ）をもつた線分は構成されない。しかし、無限分割の極限において考へるといふ今述べた方向に進む限り、彼らピタゴラス派が用いる「構成要素としての単位一」の單位性、すなわち、不可分性は一應形の上では保持される。しかし事實においては、それは零に歸するのであるから、「この世界の構成要素」としての存在價值は失つてしまふ。従つて彼らの哲學のうちにおけるその本來の存在價值が奪われることになる。他方、この彼らの「一」における自然哲學的原理としての性格、すなわち、ある大きさをもつた物體的なものという性格、をあくまでも主張すれば、大きさをもつてゐる以上、無限分割を避けられないから、その單位性は失われなければならない。また、以上の事柄を一切無視して、無限分割の極限に、なお彼らの主張する如き大きさをもつものを考へれば、それがこの世界の構成單位とされる限り、存在するいかなるものも、無限大（ ∞ ）とならなければならない。どのみち、彼らにとつては逃れる道はないのである。そしてこのような袋小路に墮ち入つた原因はといへば、彼ら特有の「一」の概念であり、それによつてこの世界を構成する彼らの自然哲學であり、さらには、その根底をなすこのような量觀をもつ彼らの數學である。問題は、彼らのこの「不可分なもの」——彼らの立場に即して、より數學的に言へ

ば、 \wedge 不可分の大きさ \vee ——の概念と、その集合としての量ないし世界を考える考え方、さらには、彼らにおける数学的なものと自然哲學的なものとの複合、にあるわけである。こうした矛盾が、今やゼノンの論によつて白日の下に曝らされたのである。従つて、彼以後の自然哲學者たちのうち、ゼノンを問題にする者である限り、その者は、この無限分割と不可分なものとの關係に對して、何らかの態度を示さなければならぬはずである。従つて、もしゼノンへの顧慮を示さない者が現れたとすれば、それは、その者が直接にはこの問題を問題として意識せず、別のことを問題にしたからだ、ということになる。もちろん、先程にも述べた如く、パルメニデスの論理は自然哲學に對して決定的なものであつたから、 \wedge 別のこと \vee と言つても、このパルメニデスの提起した問題に屬するものであることは、言うまでもない。

なお、同じエレア派に屬し、ゼノンよりも年代的に下るメリッソス (*Melissos*) は、そのパルメニデス哲學展開において、より自然哲學的な線に沿つて、變化・空虚な空間・存在するものの性格等、自然哲學的な問題を取り上げ、それを彼の屬するエレア派の立場から批判し、解明していくというやり方であり、この點をさきの第一圖において考へれば、z軸を投影したx軸が彼の哲學の本質であるということになる。従つて、彼の仕事によつて、パルメニデスの論理は、自然哲學者たちにとつて、より身近かな、そして彼らに對しより明確な形をとつたのであるからして、彼以後の自然哲學者たちは、彼メリッソスの所説と何らかの形で對決しなければならなかつた。

註]

(1) この間の事情については、大體レイヴン説に従う (*Raven, Pythagoreans and Eleatics*)。なお、ゼノン後のピタゴラス學派の事情についても、考察しなければならないのであるが、それは他の機会に譲ることとする。

(2) パルメニデスの存在の論理について、ハイリーが “the logical conclusion of the Ionian hypothesis” と考へたのは、この間のこととを意味して言つてゐる。(Bailey, *The Greek Atomists and Epicurus* p. 25)

(3) *Phy.* 185 a 17-20.

前ソクラテス期のギリシア哲學における \wedge 不可分なもの \vee

(4) ゼノンの論が、結果的には、廣範な影響力をもつたことは言うまでもないが、彼自身が、論破すべき論敵として、絶えず意識していた者が、ピユタゴラス派であつたことについては、拙稿「ゼノン—否定の精神」に觸れている。

(5) 彼の運動論の第三は、いわゆる△飛矢論▽、第四はいわゆる△競走場論▽である。これらの内容については、Lee, Zeno of Elea を参照されたい。

(6) もし存在が多であれば、それは無限大であると共に無限少であるという主旨の論である。この論には、彼自身の書いたものの断片が現存している。なお、詳しい内容については、上掲のリーの著書を見られたい。

(7) 第一は、いわゆる△二分割論▽、すなわち、線分の無限二分割による中點の無限数から運動の不可能を説くもの。第二は、いわゆる△アキレス論▽で、足の速いアキレスも龜に追いつきえないという論。これらの内容についてもリー書を見られたい。
(8) fr. 2.

三

前節に述べたごとく、エレア派の論理は、紀元前五世紀のギリシア自然哲學に打込まれた破壊的な楔であつた。それ以後の、この世紀の自然哲學者は、自己の立場に立つ限り、つまり、この自然界の實在することを肯定し、その解明としての自然哲學を主張する限り、この世界をエレア派の論理から救ふこと (σώζειν τὰ φύσιν) が、絶対に必要な條件となる。世に多元論者と呼ばれるエムペドクレス (Empedoklēs)、アナクサゴラス (Anaxagoras) の仕事は、正にそれを試みたものである。パルメニデスの存在の論理は、その論理的な整合性において絶対的なものである——こう、少くとも當時の自然哲學者たちは考へた。従つて、エムペドクレスやアナクサゴラスが存在を考へるときも、パルメニデスの存在の論理の上に全面的に立つ。しかしそれと共に、他面、感覺によつてわれわれに提示されるこの世界の生滅・變化と多様の存在を、彼らは守らなければならない。すなわち、認識論の上においても、もはや、エレア派のごとく、感覺の認識的價値を全面的に否定することは、許されない。反つて、眞の認識は、思惟に對する感覺の協同作業によつて成り立つと考へる。「さあ、すべての手だてを盡して考察せよ、いかにすれば、ものそれぞ

れが明らかになるかを。視覚をもつているからといって、聴覚にもまして、それに信をおくな。あるいは、舌(味覚)の(示す)確かなもの以上に、轟く(不分明な)聴覚を大事にするな。また、そのほかのいかなる感覚であれ、そこに認識への通路が開けておれば、それに信をおくことを惜しまず、ものそれぞれが明らかになるしかたで認識せよ。」⁽¹⁾ というエムペドクレス自身の言葉は、エレア派に抗して、認識への感覚の積極的参加を強調したものである。このようにして、感覚の(所與の)眞理性を、その全面否定から救うことによつて、この世界の多様・變化の存在を肯定し、それをエレア派の論理に即して説明しようとするのが、彼らの立場である。つまり、よく言われるように、彼らはバルメニデスの哲學と感覺所與との仲介者としての役割を演じたわけである。

さて、エムペドクレスは、感覺の示すこの世界の質的な多彩と變化とに注目する。しかもそれを説明するに當り、この質的なものに即し、質的なものを説明の原理とするというしかたでもつて、彼の哲學を構成する。すなわち、イオニア哲學傳來の二組の對立物——濇いもの(火)と冷いもの(風)、乾いたもの(土)と濕つたもの(水)——を採り上げ、これら四つのもの(四元素)を始源^{アρχή}として、それらにバルメニデスの存在の性格を與える。そしてそれらの結合・分離によつて、生滅・變化を説明する仕組である。従つて、質的相違をもたぬ——と言うよりは、質的要素を含まぬ單位一から構成されるピュタゴラス派の數量的世界とは全く異なる(質的世界構成)を彼は考えるのである。なるほど、彼にしても、この世界の(質的)多様を説明するために、四元の混合に無數の異つた比を考える。例えば、彼によると、動物の骨は火と土と水が $4:1:1$ の割合で混合したものであり、血や肉では、それらの割合が $1:1:1$ になつてゐるといふ⁽²⁾。その限りでは、數量が彼の世界を支えているわけである。しかし、この(數量)の構造も、四元という質的にそれぞれ異つたものの上に設定されたものであり、その意味では、彼の世界は、あくまでも(質的)な世界構造をもつたもの(と)言わなくてはならない。彼の哲學は、かかる量^量を混じ^まえた質の世界觀として、質的要素を含まぬピュタゴラス學派や、質的には一元的に絞つてゐる原子論者たちと、他方、質的に無限を主張するアナクサゴラスと

の、中間に位するわけで、その意味でも「不徹底な多元論者」と呼べるわけである。ところで、エムペドクレスとピエタゴラス學派とのこの違いは、彼とゼノンとの關係を問題にするとき、なお一層明らかになる。アリストテレスの生成消滅論 (De Generatione et Corruptione) の中の、「*τὸν αὐτὸν τὸν πόντον*」の點に關しては、と——彼ら (エレア派の人々) は主張する——「全存在は連続した (一つなる) もの (ὅμοιον) でなく、部分に分けられ、その分けられた諸部分が互に接觸しているものである」というふうに言つても、それは、存在は一でなく多であり、さらに空虚な空間が存在する」と言うのと、何の違いもない。なぜなら、もし存在するものがすべての點で二分割されるものであるならば、(單位) 一は決して存在せず、従つて多も存在しない。そして全世界は空虚なもの (無) となるから。」とあるが、この箇所に対し、「ここで拒否されているのは、明らかにエムペドクレス説である。その拒否の仕方には、ゼノンの特徴がある。……この部分の論は、パルメニデスによつて以前提起された諸困難を回避しようとしたエムペドクレスに、加えられたエレア派の攻撃を表しているように思われる。」というチアーニスの意見は正しいと思う。すると、エムペドクレスは、年代的にはゼノンとほぼ同時代の人であつたが、仕事の上では、一應先立つていと考えてよいであろう。事實、アナクサゴラスの場合と異り、彼の哲學には、ゼノンの無限分割への反省を示すものは全く跡付けられない。もともと、不可分なものを原理として、その數量的な構成によつて世界を考へるといふ考へ方とは、全く別の方向をとつていた彼には、そのようなことは、問題として意識されなかつたのもあろう。ところで、彼の四元の分離・結合の説も、がんらい、生滅の現象を、パルメニデス哲學に抵觸せず説明するためであつた。この生滅の問題は、質の問題と共に、彼の問題意識の表にあつたものである。それゆゑ、彼はパルメニデスの原理を説くにも、先づ「愚かな者共め。と言ふのは、その者共には、遠くまでみとおす叡知が缺けているからだ。以前存してもいなかつたものが、生成するとか、何ものかが全く死滅し壞滅し去るとか、このように信ずる者共は。」と言つて、パルメニデスの論理を犯す人々を非難し、「なぜなら、決して存してもいなかつたものから、何ものかが

生ずるといふことは不可能であるし、また、存在するものが消滅し去ることも、實現不可能なことであり、未だ問ひたこともないことであるから。」⁽⁹⁾という表現形式(すなわち、生滅との關連において、パルメニデスの存在の論理を敷衍するといふ形式)をとつて説明するのである。さて、こうした問題をば、四元素といふ互に異質的な始源^{アルテ}で解こうとする彼は、パルメニデスからメリッソスの線(前章第一圖の太線のx軸)の延長上にある、と言ふべきであろう。ここでは、數學的な考え方は消え、パルメニデスの論理とイオニア自然哲學との複合體が存する。つまり、彼はパルメニデスに直結し、パルメニデスの哲學を自己の哲學の出發點として、ピュタゴラス學派とはいわば異つた次元において異つた構造をもつ世界を組立てた、といふことになる。このことは、彼がゼノンに先立つたといふことによつて、決定的なものとされたのである。

ではアナクサゴラスはどうであるか。彼が、存在に關するパルメニデスの論理を、彼の思索の基盤にしたことは、この章の始めにすでに述べた。しかし、その基盤に立つての展開を、彼もまたイオニア自然哲學の傳統に沿ひ、この世界の生滅・變化の問題に即して行ふ。すなわち、パルメニデスの論理はまづ、次のごとき表現をとる。「ギリシヤ人たちは、生成と消滅とについて、正しい考え方をしていない。なぜなら、いかなるものも、生成するのでなく消滅するのではない。それは、(現に)存在するものが互に混合したり、あるいはまた、分離したりするのだからである。かくして、生成を混合(*mixtures*)、消滅を分離(*separations*)と彼らが名付けるならば、その呼稱は正しいものであろう。」⁽¹⁰⁾と。そしてこの生滅・變化の問題は、すでにエムペドクレスにも顯著に現れている當時の生理學の發達とそれへの關心とに影響されて、「髪でないものから髪が、肉でないものから肉が、どうして生じえよう。」⁽¹¹⁾といふ反省となつて現れる。この反問の底にある考えは、例の△あるものはあり、あらゆるものはあらず▽という原理、つまり、生滅・變化に即して言へば、△何ものも無から生ずるものでない▽という原理である。メリッソスにおいて強調されたこの原理は、アナクサゴラスの哲學を貫いている一大脊骨である。彼の思索は終始この力に推

進され、この原理に排斥しないように組立てられたと言えよう。彼は、この世界に諸物が多種多様存在し、それらが互に變化し、生滅するのをみて、これらの現象の存在を肯定し、それを説明するために、凡そこの世に存在する限りの無數に種類を異にする諸物の實在を信ずる。さもなければ、パンからパンでない肉が生じたり、血が生じたりする、と見なさなければならぬが、これは、ないものがあることになるのであつて、正に上述の原理を犯すものである。従つて、パンの中には、始めから肉や血が、極微の形で存在している、と考へなければならぬわけである。この極微のものが、彼の言うへ種子 (σπέρμα) である。つまり、パンにしる、肉にしる、空氣にしる、凡そこの世に存在する限りの、あらゆる種類のものの種子が存在するのである。これら種子は、言うまでもなく、互に質を異にするものであるからして、その意味で、この世界は質的に無限な種子の構成物ということになる。こう見てくると、アナクサゴラスの哲學は、何か原子論の方向を示しているものごとくである。「現象は目にみえないものの現れ (ἀφ' ὧν τὸν ἀόρατον τὰ γεννηθέντα)」という彼の言葉は、感覺經驗に即し、その明證の下に思惟を進めるべきことを述べたものであるが、その底には、この世界の本質を目にみえない微少子とみる考へ方が働いている。このよくな彼の發言をも考へ合せると、上述の豫感はおおしげ強まり、彼の種子は原子に相當するもののように思われる。しかし、この豫感はおもひながら事實通りであろうか。この點は、ゼノンの無限分割に對する彼の態度が問題になるとき、明らかにされるであらう。

さて、上のパンの場合の反省を一般化すれば、「すべてのものには、すべてのものの部分が内在している (ἐν παντί τὰ πάντα μίχθαι)」という原理が成立する。従つて、この原理は、先のへ何もかも無から生ぜず」という原理の、アナクサゴラス的具體化と言へるであらう。そしてこのへすべてのものうちに、すべてのものがある」という原理が、彼の哲學において、直接に働きかけそれを動かす力となつていのである。この原理に従つて、この世界に存在するものを考へれば、——またパンを例に擧げれば、一片のパンの中には、パンのスペルマを始めとして、肉や血や骨の

スペルマ、さらには、ありとあらゆるスペルマが存在しているのであつて、この一片のパンがパンとしてあるのは、その中にあるパンのスペルマが、その中に並存している他のスペルマに對して、數の上で最も優位を占めているからである。また攝取されたパンがよく血肉化されるのは、パンの中に、血や肉のスペルマがパンのスペルマに次いで數多く存しているからである、と考へる。すなわち、存在するものはすべて、その中に最も數多く存するスペルマの種類に從つて、それぞれの異つた性質をとるが、こうした種類の別なく、それらは \wedge ありとあらゆる種類のスペルマを物理的に混合している複合體 \vee である、とみなされるわけである。そして、スペルマのこの混合と分離によつて生滅變化が説明されるのである。ところで、この構造にゼノンの無限分割が加えられたら、どうなるか。それに對して、アナクサゴラスは無限分割を許容し、「小さなものの極限というものはなく、いつでもより小さなものが存在する」といふ⁽¹⁶⁾。従つて、存在するものはすべて、無限分割を受けながら、しかも \wedge すべてのもののうちにすべてのものがある \vee という原理を守るものでなければならぬ。すなわち、凡そ存在するものの中には、それがいかほど微小であろうとも、常にあらゆる種類のスペルマが含まれている。スペルマは、存在するものを分析した結果現れるものであつて、ピュタゴラス派の \wedge — \vee の如く、この世界の構成要素というものではない。すなわち、

〔ピュタゴラス派…… \wedge — \vee 〕
(綜合) ↓ 世界
 {アナクサゴラス……世界
(分析) ↓ スペルマ

というわけである。従つて、スペルマも無限分割されるものであり、 \wedge 不可分の大きさ \vee のものではありえない。しかし、かりに、スペルマが \wedge 不可分なもの \vee であり、單位としてのそれから世界が構成されるというふうには、逆に考えたとすれば、アナクサゴラスもまたゼノンのパラドクスに墮ち入らなければならなかつたであらう。しかし彼はアトムの考へ方とは正反對の考へ方をしたのである。スペルマは質の連續體である。それは、空間的に無限分割されても、何の影響も受けない。アナクサゴラスは質の連續體という方向をとることによつて、ゼノンの追求を逃れた形で

ある。言うまでもなく、ゼノンの世界は、量の世界である。ピュタゴラス派は、その量の世界ゆえに、ゼノンのパラドクスと關係をもつた。ゼノンの論理への反省は、アナクサゴラスをピュタゴラス派とは正反對の方向に向わせ、およそ非アトム的な哲學をつくらすに至つた。無限分割を許容するこの反へ不可分なものへの考え方、その數學的意味を見出して、彼に微分の考え方の源を求めようとするのはフランクである。彼の解釋にはいろいろ問題もあろうが、アナクサゴラスの反アトムの考え方が、これによつて明らかにされていることは確かである。

以上の考察は、パルメニデス↓エムペドクレス↓(ゼノン)↓アナクサゴラスという序列を示すことになる。そして、この系列は、へ不可分なものへの考える考え方とは正反對の方向に走る一線であり、それからますます離れていく一線である。なぜなら、エムペドクレスは、無限分割と不可分なものとの問題を意識しなかつたが、アナクサゴラスは、意識的に反へ不可分なものへの考え方をしたからである。

【註】

(1) 例え、Empedokles, fr. 11, 12, 13; Anaxagoras, fr. 5.

(2) fr. 4, 9-13.

(3) fr. 98.

(4) 上の“the half-hearted pluralist”という評言は、ハイリーによつて、別の關係——すなわち、ミレトス的一元論とアナクサゴラスの無限の(種類の)起源を指定する説との中間に位して、彼は火・風・水・土の四元を考えたこと——において用いられる(Bailey, op. cit. p. 42)。

(5) 325 a 6-9.

(6) Cherniss, op. cit. p. 95 n. 401. なお、ジョアキムとチャーマニスと同意見者(Joachim, Aristotle on Coming-to-be and Passing-away, p. 161)°。ヌーネットは、エムペドクレス説とせず、ピュタゴラス派の説としている(op. cit. p. 334)が、多の存在と空虚な空間(ピュタゴラス派にあつては「氣息」に等しい)の存在を主張する説の方が、ピュタゴラス派の説に當り、問題のゼノンから反駁されている説はエムペドクレス説であらう。

- (7) cf. Burnet, op. cit. p. 314, n. 4.
- (8) fr. 11.
- (9) fr. 12.
- (10) fr. 17.
- (11) fr. 10, 6-7.
- (12) fr. 1. “*ὁδὸς αὐτῆς ἐστὶν ἄσπετος ὁδὸς ἐν ἡμετέροις.*”
- (13) cf. fr. 4.
- (14) fr. 21 a.
- (15) fr. 11.
- (16) fr. 12.
- (17) fr. 3.
- (18) Frank, op. cit. S. 47 f. 彼の説は擴張解釋といふべきもので、彼によつて説かれているものがそのままアナクサゴラスの

哲學の中にあつたのではない。しかし彼の擴張解釋の方向は間違つてはいないであらう。

四

エレア派のメリッソスの断片中に、次のようなものがある。すなわち、感覺の信倚するにたらぬことを衝きながら、パルメニデスの主張する存在の性格が眞なることを證していく。そして、エレア派の立場ではもちろん許されない假定であるが、それでも「もし存在が多であるならば（——こう強いて假定するならば）、これら存在するものはそれぞれ、（パルメニデスの主張する）一つなる存在と同じ性質のものでなければならぬ。」と結んでいる。⁽¹⁾ この断片が果して、バーネットの言うように、メリッソスのアナクサゴラス批判であるかどうか、は論外にするとしても、ともかく、それが、エレア派の存在の論理に立ちながら存在の多と生滅變化とを何とかして説明しようとする者に、

一つの道を示唆しているものであると、見なしえよう。不生不滅唯一不可分の存在というこのエレア派の存在概念が、原子論の創始者レウキッポス (Leukippos) の哲學の基盤をなしていることは、彼自身の哲學がはつきりと示しているところである。それに、彼自身メリッソスの弟子であつたとか、エレア派の一員で、ゼノンの教えを受けたとか、こういう古代の傳承が存しているが、その存在そのものが——傳承の史實性はともあれ——彼の哲學の根本性格を暗示している。このエレア派の要素に、彼の出生地ミレトスが象徴する自然學的傾向とそれへの素質とが、彼においては加わる。最初にあげたメリッソスの指針と、この自然學的要素との結合は、彼における原子論アトムの成立を、ある程度豫示しているとも言えよう。なぜなら、多なる存在はそれぞれ不生不滅不可分の充實體フルティタ（もちろん、パルメニデスの主張する意味での）と考えられるからである。しかし、彼における原子論は、ゼノンとの對決によつて明確な形をとる。ゼノンとの對決の事實は、彼の哲學そのものが、この對決に對する彼の明白な解答になつてゐることからしても、明らかである。その上、アリストテレスが原子論成立の事情を敘説している有名な箇所(4)で、その成立を必然的ならしめるものの一つとして、前章に引用したゼノンのエムペドクレス反駁を擧げているが、これは、アリストテレス自身も、へゼノンの無限分割への反省を原子論成立の前提として考へていたことを示すものである。ゼノンに従つて、存在が無限に分割される時、ピュタゴラス派の考へ方に即して、この世界が何か窮極の存在單位から構成されていると考へるならば、例のゼノンのパラドクスは逃れられない。ゼノンの無限分割において、分割されたものは、その極限において零ゼロとならねばならず、零を避けるために、何らかの大きさを考へれば、またしても無限分割が成立し、その極限性・不可分性と矛盾しなければならぬ。レウキッポスは、ピュタゴラス派の考へ方の方向をとる以上、このゼノンの無限分割に對して何らかの對抗策を考へなければならぬ。零への消滅を喰ひ止めるへ不可分なもの(5)が何と大きさをもつたものを、單位と考へなければならぬが、そのために、無限分割を喰ひ止めるへ不可分なもの(5)が何と考へられないであらうか。理論的には、凡そ大きさをもつたものは、必然的に無限分割されなければならない。例

えば、線分は無数の點に無限分割される。(空間的) 大きさという數量の世界の内に止る限り、ピユタゴラス派の犯した矛盾が示すように、ゼノンの袋小路からは逃れえない。ピユタゴラス派と同じく、この世界を單位から構成されたものと考へながらも、パルメニデスの存在の論理に立つ彼に残された道は、(第二章第一圖の) γ 軸を捨て、 α 軸に立つことであり、ここから懸案の解答を求めなくてはならぬ。ここにおいて、先に觸れた彼の自然哲學的傾向と素質とが、大きな意味をもつてくるのである。彼は、アナクサゴラスが量から質の世界に逃れて、無限分割をなすがまゝに許したのとは正反對に、 α 不可分なもの \vee を措定して、無限分割を阻止するという方向をとつた。しかし、ゼノンの世界 (α) 軸に止る限りそれを阻止しえないから、それとは全く異なる自然學の立場から阻止したのである。では、どのようにしてそれを喰ひ止めたのか、すなわち、何らかの大きさをもつ原子の不可分性を、どのようにして確立したか、ということである。この問に對する答は、原子の性質に對する彼の考へ方を吟味することによつて與えられる。

アトムが α 不可分なもの \vee であるゆえんは、それが「微小で部分をもたぬもの (*átomicos*)」だからである、と彼は考へる。アトムは、もともと相當程度の分割を経た後に始めて結果したものであるからして、 α 微小 \vee であるのは當然であるが、 α 部分をもたぬもの \vee とは何か。部分を持たなければ、ゼノンの論によれば、それは零の大きさであり、従つて無ではないか。しかし、ここでも彼は全く自然學的觀點に立つて、アトムは部分に分割されるに必要な空虚な空間を含まぬパルメニデスの充實體だから、その意味で α 部分をもたぬもの \vee と考へるのである。なるほど、アトムは大きさをもつ以上、理論的には分割されよう。しかし、實際に存在する物體として、その内部構造は部分に分割できないものであり、その意味で部分をもたぬもの \vee である。このような自然學的な意味において、アトムは單位性、不可分性を獲得するのである。このことは、アトムが内部變化をもたず、不生不滅であると考へられることに連なる。アトムの *átomia* とは、このことである。さらに、アトムのこの *átomia* に關連して、アトムが α 内容の緻密

なもの (*partia*) であることが主張され、*wholly*、 \langle 充實體 \rangle (*fullness, fullness*) とも言はれたのである。これは、アトムが、内部變化を受付けぬような緻密な (——つまり、上述のごとき意味で部分をもたぬ) 充實體であることを意味している。彼のアトムは、エレア派の存在の論理を基盤にしつゝ、今や、自然學的原理としての \langle 不可分なもの \rangle 、すなわち、ピュクガラス派の \langle 一 \rangle のごとく、その本質において數學的であるのとは異り、自然學的原理として \langle 物體性 \rangle を確立するのである。彼のアトムも、大きさをもつものであるからして、 \langle 不可分の大きさ \rangle のものであるに變りはない。しかし、その本領は \langle 不可分の物體 \rangle (*atomic being*) と呼ばるべきものである。この純粹な \langle 物體 \rangle の獲得が、ゼノンのパラドクスを克服した原因をなすのである。 \langle 不可分の物體 \rangle としてのアトムの本質に關する考察を、延長していつたところに、アトムの \langle 重さ \rangle の問題が出てくる。もちろん、この問題は、アトムの運動の問題に關連して出てきたことではあるが、アトムの重さが考えられるに至つたことそのことが、アトムの物體性を示していると言えよう。

さて、 \langle 不可分の物體 \rangle の確立は、彼における自然學的要素が成しとげたものであるが、この要素は當然、生滅變化の基礎をなす (と彼によつてみなされる) アトムの空間的運動の問題を大きなものとする。かくして、彼は、運動を可能なものとするために、それに必要な空虚な空間の存在を、整合的に説明しなければならない。すなわち、存在 \parallel 充實體、空虚な空間 \parallel 非存在 というパルメニデス以來の傳統的な考え方を改變し、存在を廣く解して、空虚な空間 \parallel 非存在 (*being*) において否定される存在 (*not-being*) は、充實體としての存在であつて、廣くは充實體も空虚な空間も等しく存在するものであると考へる。つまり、空虚な空間は、その中で充實體が存在し運動しうることとき一種の存在であると考えたのである。すると、彼によつて考えられた世界とは、空虚な空間を場に、無数のアトムが存在する不連続の世界ということになり、それは、無限の氣息 (*breath*) を背景に不可分の大きさの \langle 一 \rangle が多數存在したピュクガラス派の世界觀と、構造を一つにするものである。たゞその間には、エムペドクレスによつて空氣が一物質である

ことが發見されたため、氣息（空氣）は空虚な空間に置き換えられた。そして他方、大きさをもつた一は（不可分の物體）に換えられた。かくしてレウキッポスの原子論は、自然哲學として、全く純粹な形をとるに至つたのである。すなわち、彼は、その世界構造の根本圖式において、ピュタゴラス派に通じ、それを純化展開したものと云えよう。しかし、彼の無数のアトムは質的にはすべて同一であり、各種のアトムはたゞ形を異にするのみであつて、この世界の諸物の多種多様と生滅變化とは、これら形を異にするアトムの結合の位置（*ὁμοίωμα, τόπος*）と順序（*τάξις, διάδοχη*）とによつて説明されるのであり、この點はアナクサゴラスの質觀とは正反對であつて、形・量という數學的側面をもつたものとして、ピュタゴラス派に直接連るものである。しかしこれはあくまでも一側面であつて、アトムの本體は物體性にあると言わねばなるまい。その意味で、ピュタゴラス派が自然學を數學に融合させたのとは反對に、アトム論は、數學を自然學の方に融合させたと言うべきであらう。

アトムを單位として構成される不連續の世界を考える點で、原子論者は確かにピュタゴラス派の直系の子孫であると言わなければならない。しかし、その單位をなすアトムが、（不可分の大きさ）から（不可分の物體）に至つたのは、自然哲學としての大きな完成であり純化である。そしてこの發展を絶えず動かした第一のものはゼノンの論であつた、と言わなければならない。ミレトスに始つたギリシアの自然哲學は、その完成の一頂點として、またしてもミレトスの人（レウキッポス）を持つたのである。レウキッポスの原子論哲學は、彼に續くデモクリトス（*Δημόκριτος*）によつて、全領域に互る組織化と完成化がなされた。まことに、それはギリシア精神の一精華をなす、と言うべきであらう。⁽¹⁾

〔註〕

(一) fr. 8.

(二) op. cit. p. 328.

(三) Tzet. Chil. II 980 (D. 67. A 5); D. L. IX 30 (D. A 1)

前ソクラテス期のギリシア哲學における不可分なもの

- (4) De gen. corr. 324 b 35f.
 (5) 後にも述べるように、プラトンの論そのものはピタゴラス派哲學と同一性格のものであるが、たゞ、ピタゴラス派に由来する「イキマ」 \surd という言葉がプラトンの呼ばれたことについては Burnet, op. cit. p. 336 n. 5 を参照されたい。
- (6) Simp. Phys. p. 925, 10
 (7) Simp. op. cit. p. 36, 1
 (8) Simp. op. cit. p. 28, 4
 (9) コーンフォードは、ギリシアの原子論の頂點としてエピクロスの哲學を擧げ、この哲學における非科學性を説くことによつて、ギリシア精神そのものの科學性に對し、否定的態度をとつてゐる。しかし、自然哲學の考究そのものを目的とせず生の問題の手段として自然哲學を考ふる古代末期のエピクロースを、ギリシア原子論の頂點となすこと自身、問題があると思う。それは、ギリシア精神の科學性の缺陥を引き出す彼の論法そのものも首肯し難いものがある。(Cornford, Principium Sapientiae, chap. II Epicurus)

【附記】

「前ソクラテス期」というおかしな言葉が、pre-Socratic, vorsokratisch, pré-socratique の直譯であることを、お断りしたい。この期の哲學者たちは、イオニア、イタリアを舞臺としたギリシア哲學の最初の嚮手である。時代的には、その末期の人々、ことにデモクリトスはソクラテスと重なる——いな、その活動は、彼ソクラテス以後にも及ぶのである。従つて、それに對して、「前ソクラテス期」といふ言葉を使うのは不適當であり、この書は田中教授「哲學研究入門、古代哲學」(プラトン迄)の項(二〇頁)「チアーニス(ト提提)序文(一四頁)等も指摘するところである。しかし、 \surd 、その問題意識、解答方法、その成果としての哲學は、大きくみれば、一つの連續した流れであり、それに對して、ソフィストたち、ソクラテスからは、別の問題意識と標榜をもつた哲學(いわゆる「アカデマイの哲學」と呼ばれるもの)が始まるのである。この觀點から、つまり、内容そのものの觀點からすれば、この問題を含む、そして使ひ古された呼稱も、一應の妥當性は持ちうるのではなからうか。ことにこの小論のごとく、問題のこの期の諸哲學の流れの裡に入不可分なもの \surd を軸としたその連續的な變化・展開・反應の相を考察しようとするものにあつては、反つて適當ではないかとも思われるのである。これが、「前ソクラテス期」という言葉を敢て使用するに至つた動機である。

(一九五六・四・二二)

(筆者 神戸商科大学「哲學」助教授)

THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article

The "Indivisible" in Pre-Socratic Philosophy

by Teruo Suzuki

It is by the Pythagoreans that the atom-concept was first introduced into Greek philosophy. They thought that things are numbers, which are aggregations of "units" (ἕν, μονάς), and that the world consists of these units. Although their "unit" was originally mathematical, they used it as a principle of their natural philosophy; so that it came to have a dual character, mathematical-physical. It is at the inconsistency involved in this duality of their "unit" that Zeno attacked with his argument by "infinite division". Thereafter Leucippus put a stop to Zeno's infinite division by setting his "atom", i. e. "indivisible body" (ἄτομον σῶμα), from his purely physicist point of view, rehabilitating at the same time the being of the void (κενόν), which had been done away with by Parmenides. With both these, atoms and void, he succeeded in explaining the multiplicity, coming-to-be, passing-away, and change of things in this world, keeping consistency with the Eleatic logic of being. The case of atom-concept in pre-Socratic philosophy may thus be said to be an example of scientific refinement, proceeding from the Pythagorean "unit of indivisible magnitude", full of inconsistencies, on to the Atomists' indivisible body. And the chief promoter of this progress was the argument of Zeno.

On the other hand, the so-called pluralists, Empedocles and Anaxagoras,

tried to solve the difficulties put forth by Parmenides, in a way quite different from that of Atomists. Of these two pluralists, the former, who in his work preceded Zeno, was not to conceive the latter's problems: Zeno's paradoxes were beyond the scope of his scientific outlook. Anaxagoras did try to solve these problems, but in a direction quite contrary to the Pythagoreans-Atomists. The line of development, Parmenides—Empedocles—Zeno—Anaxagoras, which presents the order of the works of these philosophers, is observed in this article as of contra-atomistic character.